

〈資 料〉

苦の受容と希望の創出にむけて

Possibility of Hope Beyond Acceptance of Agonies

福田 み ゆ
(Miyu Fukuda)

小 崎 眞*
(Makoto Kozaki)

序 論

一般的に人の死は悲嘆と苦痛をもたらす。そのような暗闇のなかにあつて、希望を語り得るのか。神戸連続児童殺傷事件¹⁾にあつて、山下彩花(当時10歳)は犯人の少年A(当時14歳)により撲殺された。突然に娘を奪われた母京子は自己の道理に合わぬ死の到来により絶望の深淵に引きずり込まれた。にもかかわらず、京子は希望を語る。本稿では彩花と京子を対象とし、そこに紡ぎだされる命の語りを読み解く。

京子は彩花の死に対して、精神的打撃やパニック、少年Aに対する怒り・不当感・敵意とルサンチマン(うらみ)を抱いていた。しかし、彩花の死を真正面から受け止めようと強く決意した段階で心情変化が出てくる。そのきっかけは彩花である。彩花は少年Aに殴打され病院へ搬送された。医師は余命2、3日としていたが、彩花は1週間ICUで生きていた。京子は、彩花と1週間向き合うことで、彩花の笑顔を彼女の最期まで懸命に生きる姿の中に見出した。この彩花の笑顔から、京子は彩花が少年の行為から解放されたと確信した。そして京子は彩花の懸命に生きる姿から、どのようなことがあっても彩花の死を無駄にせず生き抜こうという決意に至った。

京子は少年Aへの憎悪はあるものの、彩花の死を「あきらめ」や「憎しみ」とは異なる形で受け止める方法を生みだそうとした。悲しみを希望に変化させたのだ。死の受容形態の1つとして悲劇(死)から希望の創出は可能なのか。その可能性を山下京子の手記ととも

に、パウル・ティリッヒ²⁾、森岡正博³⁾の文献を手がかりに、京子の「悲しみの中から希望を見出す」という世界観を探求する。

個・存在の確立は希望を紡ぐか：

パウル・ティリッヒの世界観

京子の心情変化のエッセンスとなったものはパウル・ティリッヒの『生きる勇気』⁴⁾である。これは京子と親交のあるジャーナリストの東晋平⁵⁾との対話中に紹介されていた。ティリッヒの思想を読み解くことで京子の内面変化を探求する。

ティリッヒによれば、勇気とは自己肯定を妨げようとするものに抵抗し、それにもかかわらず自己を肯定することだ。この妨げようとするものを不安と表し、さらにその不安を「実存的不安」と「病的不安」に分類する。「実存的不安」とは、自己の中で完全に取り除かれることはできないもので、自己自身で引き受けなければならないものである。この「実存的不安」があるにもかかわらず自己を肯定する、それが「生きる勇気」であると彼はいう。自己の肯定を否定するような出来事や要因があるにもかかわらず、その自己の存在を個・存在としての確立によりあえて肯定する。

「生きる勇気(実存的不安にもかかわらず自己肯定すること)」を獲得する方法として、①部分としての自己肯定、②個人としての自己肯定、③部分としての自己肯定と個人としての自己肯定を下支えするものとしての自己肯定の3点が挙げられる。①は自己を集団や共同体に参与させることで自己肯定に取り入れる。②は自らが自己収斂し個別化された、他と比較されない代替不可能な自己であろうとすることによって、自己肯定に取り入れる。③は自己が存在自身にとらえられていることを受け

同志社女子大学大学院生活科学研究科
生活デザイン専攻

*同志社女子大学生活科学部

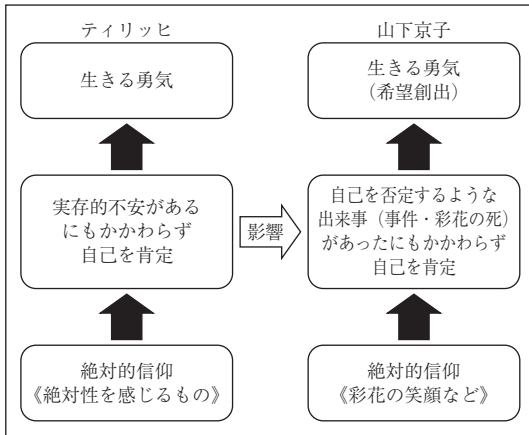


図 1

入れることにより、実存的不安を自己肯定に取り入れる。つまり絶対的の信仰があるとき、自己肯定がなされる。テリリッヒの考える絶対的の信仰は絶対性への信頼であり、絶対性への感知である。(図 1 参照)

彩花を失い、悲しみや憎しみ、苦しみで支配されていた京子は当時、自己肯定感を持ち得なかった。しかし、様々なマイナス要因があったにもかかわらず、京子は自身が活着ていることに価値を見出し、実存的不安をも受け入れるかたちで自己を肯定したのである。京子の絶対的の心のよりどころは彩花の最期の笑顔や彩花の懸命な姿そのものであったと推察する。京子はテリリッヒの論に触発され、彩花の死によりもたらされた実存的不安を絶対的の信仰を下地として克服し、京子という個・存在の確立を自己肯定という形で行ったのだ。したがって、個・存在の確立によって、悲劇のただなかにあっても、希望を創出し得たと言える。

他との関わりは希望を拓くか：森岡正博の思索

テリリッヒは現実を受け止め、悲劇を滋養に変えていく力を持つという論の下、個・存在の確立に重点を置いた。しかし、テリリッヒの考えは自己内だけに希望を見出す方法論でもある。京子はテリリッヒに強い影響を受けつつも、自己内だけで悲劇を希望に変えることへの限界に気づいたのではないかと。そして、他者という関わりの中に希望の場所を探したのではないかと。手記内でも京子の心情変化にはテリリッヒだけではなく、外の世界(他者)との「つながり」の場面が多く記述され、それらからも強く影響を受けていることが読み取れた。したがって、森岡の論である「他とのつながり」に焦点を当

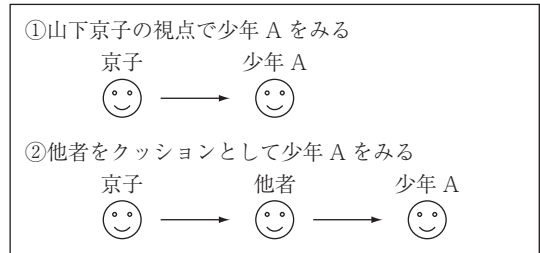


図 2

て、京子の心情を探求する。

森岡正博は近著『33 個めの石』⁶⁾の中で他者性の意義を探求した。2007 年にアメリカ・バージニア工科大学で起きた銃乱射事件⁷⁾を記したもので、森岡は最後に付け加えられた石(犯人追悼の石)に注目し、その石は敵と味方の対立を無効化し報復の連鎖を超越していくシンボルになるとしている。この事件をなんとかして受け入れ消化しようとする、混沌とするコミュニティの苦悩がその石にあらわれていると指摘する。

京子は個や存在の確立に重点を置いており、「存在の勇氣」や自己肯定感の高まりを重視し、現実を受け止め生き抜く力、悲劇を滋養に変えていく力をつけるとしていた。しかし、京子のなかには、他とのつながりの受容という森岡の論に通底するものがある。33 個めの石のような、他者という存在を巻き込んで京子自身が自己の心情と向き合い、苦悩を受け止め消化しようとした点である。

京子にとって、少年 A は憎悪の対象である。しかし、京子は自己の心情にとらわれず、他者とのつながりを持ったことで、視点変化がもたらされ、他の心情を少年 A に対して抱いたのだ。視点変化のためには他者が必要で、他者を通して、対立が緩和される。(図 2 参照)

図のように①京子の視点から少年 A をみると彼は憎悪対象である。しかし②京子と少年 A の間に他者(ここでは彩花、手記に感動した読者、事件取材をした記者等すべてを含む)をクッションのように挟むことで視点変化が生まれる。京子自身が自己にとらわれず、他とのつながり(他者)を持つことで、憎悪とは異なる心情を少年 A に対して抱いた。また、京子が少年 A に宛てて記した手紙には「もし、わたしがあなたの母であるなら…、真っ先に、思い切り抱きしめて、共に泣きたい。言葉はなくとも、一緒に苦しみたい」⁸⁾という言葉がある。ここでは他者として母(母の視座)が登場する。彩花の母としてではなく、匿名性、無名性をもつ母である。匿名性、無名性をもつ母ゆえに少年 A に母として

向き合えたのだ。

このように、京子は苦しみのなかで、自分とは異なる他者からの問いかけに、京子なりに解釈を加えて新たな自己世界をそこに描いた。彩花の最期の笑顔等に根源的受容を感知しつつ、自分とは異なる他者へも関与し、他者をクッションとして取り入れることで得られる視点変化も、希望創出には必要要素であることがわかる。

結 論

ティリッヒの絶対的信仰を土台とした根源的受容と、他者というクッションを用いて自己の視点変化を行うことで、人は苦痛を受容し、希望にかえることができるのではないか。自己内に留まらず、他者と関わりをもつことで、京子は自己と同一化し得ない異なる他者と出会った。それは自己との同化を通して、積み上げてきた固定観念が解体されることを意味する。他者の価値観を照らし出そうとすればするほど、異なる面が見えて不安が生じる。しかし、その不安が自己と世界を見つめなおすきっかけともなる。この想定外的心情を通し、新たな自己を構築することができるかもしれない。そこに既存の自己の世界観の延長線上に描き出される希望とは異なる希望が立ち現れる。

注

- 1) 神戸連続児童殺傷事件（こうべれんぞくじどうさっしょうじけん）1997年、兵庫県神戸市須磨区で発生。当時14歳の中学生（少年A）による連続殺傷事件。この事件で、2名が死亡し、3名が重軽傷を負った。死亡した1人である土師敦に対する残虐な殺害方法が注目を浴びた。
- 2) パウル・ティリッヒ（Paul Tillich）1886～1965
ドイツ生まれ。アメリカのプロテスタント神学者、哲学博士。1933年ナチズムに反対しアメリカに移住。ニューヨークのユニオン神学大学教授。アメリカの深層心理学や精神医療にも深い影響を与えた。主著『組織神学』『ティリッヒ著作集』など。
- 3) 森岡正博（もりおか・まさひろ）1958～ 高知県生まれ。1988年東京大学大学院人文科学研究科単位取得退学。1997年大阪府立大学総合科学部助教授。1998年同教授。2005年大阪府立大学人間社会学部教授。
- 4) パウル・ティリッヒ『生きる勇気』平凡社 1995。

- 5) 東晋平（あずま・しんべい）ジャーナリスト。1963年、神戸市生まれ。駒澤大学文学部卒。大学在学中から月刊誌等に連載をもち、そのままフリーランスとして今日に至る。1997年に起きた神戸連続児童殺傷事件では、亡くなった山下彩花の遺族と一貫して生と死をめぐる対話を続けてきた。
- 6) 森岡正博『33個めの石』春秋社 2009。
- 7) バージニア工科大学銃乱射事件（バージニアこうかだいがくじゅうらんしゃじけん）アメリカ合衆国バージニア州ブラックスバーグのバージニア工科大学で2007年4月16日月曜日に発生した銃乱射事件である。32名が死亡し、それまでアメリカの学校での銃乱射事件で史上最悪の犠牲者を出した。大学には追悼の石が32個おかれたが、ある日から犯人のいしを含めた33個の石が置かれるようになったという。33個めの石は何度取り除かれても、誰かが置いたようだ。
- 8) 山下京子『彩花へ「生きる力」をありがとう』河出書房新社 1998 P195。

参考文献

- 山下京子『彩花へ「生きる力」をありがとう』河出書房新社 1998
- 山下京子『彩花へ、ふたたび あなたがいてくれるから』河出書房新社 2002
- 山下京子・東晋平『彩花がおしえてくれた幸せ』ポプラ社 2003
- 山下京子・東晋平『彩花がおしえてくれた幸福（しあわせ）』ポプラ社 2003
- 森岡正博『33個めの石』春秋社 2009
- アルフォンス・デーケン『死とどう向き合うか』NHKソフトウェア 1994
- パウル・ティリッヒ『生きる勇気』平凡社 1995
- 森田美千代『パウル・ティリッヒ研究（Ⅱ）-不安と生きる勇気-』梅光女学院大学論集 1979
- 土師守『淳』新潮社 2002
- 土師守・本田信一郎『淳それから』新潮社 2005
- ドナルド・B・クレイビル／スティーブン『アーミッシュの赦し』亜紀書房 2008
- マイケル・ウォルツァー『寛容について』みすず書房 2003
- 村上陽一郎『近代化と寛容』風行社 2007
- 宮本義信『アメリカの対人援助専門職』ミネルヴァ書房 2004

苦の受容と希望の創出にむけて

速水由紀子 『「つながり」という危ない快樂』 筑摩書 育出版 1999
房 2006

(2010年11月30日受理)

生命倫理教育研究協議会 『テーマ30 生命倫理』 教